

トップニュース

沖縄県宗務特別区「太平洋戦争全戦没者・沖縄戦終戦80年追悼法要」で「追悼のことは」を述べる吉川嘉勝さん



「人間は一属一種のホモサピエンス。肌の色が違う、住んでいる場所が違う。主義主張や宗教、いろいろあっても一属一種。どうして助け合い、生きていくことができないのか」。7月3日に沖縄・平和祈念公園で営まれた太平洋戦争全戦没者・沖縄戦終戦80年追悼法要。「追悼のことは」を述べた沖縄県渡嘉敷村の吉川嘉勝さん(86)は、参列者を前にこう訴えた。吉川さんは沖縄戦集団自決を生き延びた1人。法要を前に話を聞いた。

(2面に関連記事)



沖縄本島から西に約300kmの渡嘉敷島。1945(昭和20)年3月28日朝、当時6歳だった吉川さんは家族や親族など約30人と輪になっていた。戦争が激化していく中、前日に米軍が島に上陸。防衛隊として駐留していた日本軍の命令で住民は島北部の北山に集められていた。「1000人に満たない島民の中、半分以上はいた」と吉川さん。群衆の前に立った村長が軍人に耳打ちされながら、訓示を始めた。よく聞き取れなかったが、「日本軍の邪魔にならないため」と自決を促しているようだった。

「私は8人きょうだいの

吉川嘉勝さん 母の叫び声で沖縄戦集団自決から生き延びる

末っ子。背中に温もりがあったのを覚えているから、母の膝に抱えられていたのだと思う。隠れていた防空壕からは家族8人で行ってきたが、軍から配られた手榴弾の数が十分ではなく、一緒に自決するため、大きな輪になっていた。そして、村長の「天皇陛下、万歳」の声を合図にあちこちで手榴弾が炸裂する爆音が鳴りだした。こたまする絶叫や泣き声。おびたらしい血を流した人。手榴弾で絶命できず、家族同士、鎌や鉋で切りつけあったり、子どもの頭に石を振り下ろしている大人もいた。役場に動いていた16歳の兄が「じゃあ、僕らもやるよ」と言って、2発持たされていた手榴弾の一方を打ち付けたが不発。続けて、もう1発の信管も打ち付けたが爆発しなかった。「それを見た父が火を焚いた。その中に(手榴弾を)ぶちこめ」と言った。そうしたら爆発するだろうと。どんな心境だったのか、私は不思議と死ぬ怖さは感じなかった。死のイメージがなかったのかもしれない。

「皆立テ 命ル宝ヤサ」

「『死ぬのはいつでもできる。命こそ宝。立って逃げよう』と。方言を使う者はスパイ扱いされていたのに、とっさに沖縄の言葉が出たのだろう。それを聞いて、私たちはその場から逃げ出した。追いかけてきた兵隊に捕まった人もいたが、別のグループも含めて50、60人ほどが一緒だった

「『死ぬのはいつでもできる。命こそ宝。立って逃げよう』と。方言を使う者はスパイ扱いされていたのに、とっさに沖縄の言葉が出たのだろう。それを聞いて、私たちはその場から逃げ出した。追いかけてきた兵隊に捕まった人もいたが、別のグループも含めて50、60人ほどが一緒だった

戦争体験者の声聞く 幹部が沖縄で平和学習



仏教婦人会総連盟(井上智子会長)は、戦後80年に際して平和への思いを新たにしようとする6月の3日間、幹部研修会として沖縄で現地平和学習を行った。

仏婦総連盟

た悲惨な体験を伝える「ひめゆりの塔」などを見学。平和祈念公園では平和の丘で献花を行い(写真左)、班別で平和や戦争について話し合いを行った。研修会を終え、東京教区・関谷加代子さんは「戦争体験者の生の声を聞くことで、当時の人々の苦しみや悲しみ、平和への願いを感じた。戦争の記憶が薄れる中で、現地で学ぶことは、戦争の教訓を次世代に継承していく上で重要なこと」と、岐阜・細野留美代さんは「沖縄の人々の戦争体験を通じて、戦争の不条理と残酷さを感じた。また、戦時中の教育によって、疑心や不安がなくなっていたことが、今改めて感じることができた」と、大分・山崎あき子さんは「沖縄の人々の悲しみや声にもっと耳を傾け、もっと知るべきかと思った。参加させていたたい代表として、まずは教区、租界に伝える場、学ぶ場を作らなくては」と今後の活動に思いを馳せた。



ように思う」。この集団自決の犠牲者は330人にのぼった。周囲は米軍による砲撃の雨。吉川さんは22歳の姉に背負われて逃げ延びたが、父はこの移動中に爆弾の破片を頭に受けて亡くなった。「その後は山の中を逃げ回った。8月15日に戦争が終わって米軍に保護されたが、不当な扱いを受けた。毒

入りでないことを示すために米兵がお菓子を2つに割って一緒に食べてくれたこともあって、この時に戦争をした敵味方も同じ人間という思いを強くした」と吉川さんは言う。

戦後、学校の教員になった吉川さん。半世紀以上、集団自決の記憶を語ることはなかったが、那覇の中学校で校長をしていた50代の頃、同僚に請われて全校生

徒の前で初めて体験を語った。これを機に、講演依頼を受けるようになり、退職後は集団自決の歴史を独自に調査し、島の戦跡を案内する活動も始めた。その原動力となったのは母のあの声。「なぜ母はあの時、あの地獄のような修羅場で人間的な行いができたのだろうか。母の決死の行動がなければ、みんな命はなかったかもしれない。録されている。

だから」と、吉川さんは母の背中を押した思いを今も「結論のない問い」として持ち続けている。



奉仕団で出会った
2人の92歳……8

- みんなの法話……………4
学ぶ親鸞聖人 ご生涯×教え…5
お釈迦さまの前世物語……………3
季節の養生と薬膳……………3
本願寺インスタ倶楽部……………3
読者のひろば(詰将棋)……………7



夏休みの日課と言えば、早朝に境内に集うラジオ体操だった。ラジオの放送が終わると住職の父が時折、子どもたちを本堂に上がらせて仏さまのお話をした。お盆には必ず、お釈迦さまの弟子である目連尊者の話が出た。『盂蘭盆経』というお経に説かれた、餓鬼道に堕ちて苦しむ母を救わんがために、目連尊者がお釈迦さまに教えを請う話だった。幼いながらも印象に残った。

▼大人となり、門徒宅にお盆参りに行くようになり、この話を自分もするようになった。何度も話すうちに味わいが深くなった。餓鬼道で責め苦にあう目連の母と私は全く同じ。日々、知らず知らずのうちに欲や憎しみにかられ、相手を傷つける罪悪感の凡夫だと気づかされる。阿彌陀如来はこのような私を必ず救うと誓われ、本願他力の道を成就された。お盆とは、阿彌陀如来からいただく信心のよろこびをあらためて味わう機会だと受けとめている。

▼昔、父はお盆の墓参りの準備をしなからこうも言った。「今の自分の生き方を見て先祖はどう思うのか。亡き人の声を聞くことが墓参りの大切な心得であり、そのことを通して阿彌陀如来のご本願のこころをいただくことなのだ」と。

▼亡き方々が、阿彌陀如来の願いを聞かせてくださる法縁として伝えてくださったお盆を、今年も迎える。阿彌陀如来に願われながら、亡き方々を偲びながら、私にとって何が本当に大切なことか、自分は今どこに立っているのかを見つめていきたい。

購読料 1部120円(年間4,080円) 定期休刊 7月10日、12月10日
浄土真宗本願寺派 代表電話
宗務所 075(371)5181/大谷本願 075(531)4171

宗派公式Webサイト <https://www.hongwanji.or.jp>
本願寺ホームページ <https://www.hongwanji.kyoto>

表具師の技で鮮明に蘇る表装古典
寺宝継承の匠技
寺院用御影修復/在家用御本尊御洗濯/
掛軸製造/襖/屏風/額/肖像画/日本画制作

西田松月堂
京都府京都市西本願寺前 TEL.075-371-9429 FAX.075-341-4609

京ゆば **湯葉弥**
京・五条御前東 電話〇七五―三二四―五七八ハ
<http://www.yubaya.co.jp>

雅楽用打ち物・経切太鼓
その他宗教用太鼓一式製造元

創業元禄初年 **大笹屋**
京都市左京区聖護院蓮華蔵町3-6
TEL 075-751-6889
FAX 075-751-7304
E-mail:m@ozasaya.com

施設管理は、
オリックス・ファシリティーズ株式会社

本店 〒600-8335
京都府京都市下京区大宮通仏光寺下五坊大宮町9-9
TEL 075-8411-7550(代表)
FAX 075-8411-7666

薫口堂 KUNGYOKUDO
千 600 8349
電話 075 371 0162
京都市下京区堀川通西本願寺前

伽羅・沈香・線香・匂い袋
香老舗 創業文禄三年(1594年)

薫玉堂

大乗 **DAIJO** 8月号
毎月1日発行/85頁/80ページ
年間購読料 4,500円(税・送料込)
1冊 375円(税・送料込)

戦後80年 沖縄・長崎・広島で追悼法要
お盆アーカイブス「子や孫に伝えたい話」

- 華過記……………藤井 真
- DAIJO法話……………中川 大城
- ご機言!お寺の掲示板……………江田 智昭
- 結婚してお坊さんになりました……………前田 純代
- みのりのエッセイ……………竹本 崇嗣
- 大乗ほうわ・HOWA・法話……………後藤 明信
- つながる医療と仏教……………月江 教昭
- その他コーナー多数!

本願寺出版社
600-8501京都市下京区堀川通花屋町下(西本願寺)
<https://hongwanji-shuppan.com/>
TEL 0120-464-583 FAX 075-341-7753